

「日々の理科」(第 3018 号) 2022, 11, 11

## 「秋の東北鉄道旅行 (19)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

秋田発酒田行の普通列車は、2両編成のワンマン運転だった。羽越本線のような特急が走る幹線でも、無人駅が増えた今日では、普通列車の多くは車掌のいないワンマン運転が多い。自動券売機で切符を買える駅なら良いが、それもない無人駅から乗った乗客は、車内で運賃を支払うことになる



車内には整理券発行器があり、運転士の後ろには、料金収受箱と、運賃表がある。無人駅で下りる乗客は運転士に一番近い扉から降りて、運賃を支払う仕組みだ。路線バスと同じ方式である。



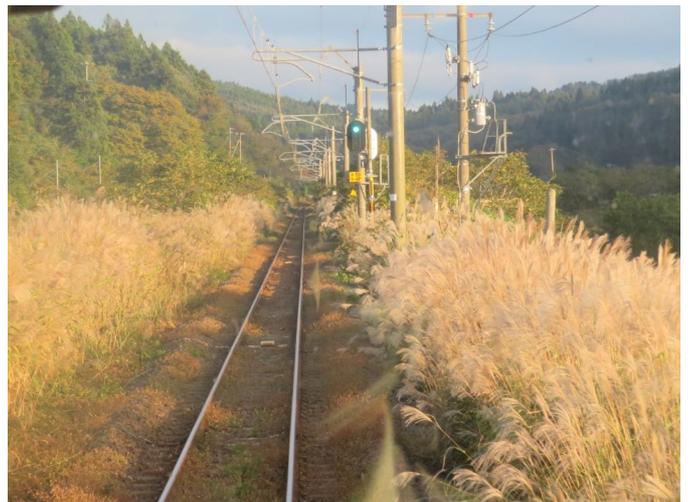
この日乗った酒田行普通列車は、若い女性運転士が担当していた。実践訓練中だったようで、となりでベテラン運転士が、時々指示を与えていた。こういう地方線区で、若い女性乗務員が活躍していることに、とても嬉しい気持ちになった。



秋田駅を出発してしばらくすると、大きな川を渡る。「雄物川 (おものがわ)」である。雄物川は秋田県南部を流域とする一級河川で、本流に1つもダムがないことで有名だ。車窓から見ても、ゆったりと流れる姿が印象的だった。



しばらくすると、右車窓に日本海が見えてくる。まぶしいほどの夕陽が、車内にも射し込んできた。



羽越本線の線路は、奥羽本線にも増して「ススキ・ススキ・ススキ」だった。私はふと、満月の晩にもう一度この区間の列車に乗ってみたいと思った。月に照らされたススキは、銀色に輝いて、さぞ美しいだろう。